

美術館前庭の真っさらな雪原、陽光に当たった雪片のきらめくさまに眼を奪われます。除雪は一苦勞ですが、癒されるのもまた雪の美しさです。どうぞ美術館で、美を堪能するひとときを。

展覧会のお知らせ

常設展示

「小川原脩記念美術館開館 15 周年記念 自伝風な展覧会—私の歩いてきた道」

それぞれの年代の作品が持つ、小川原脩ならではの作風をお楽しみください。小川原脩の画業を代表作で迎える展覧会です。

会期：4月20日（月）まで

企画展示

「不思議・ふしぎ・この絵なんだろう？ 想像する展覧会」

色や形が強調されたり変形されたり、小川原脩が描いた「ふしぎな絵」。作品に向かい合ってどんなイメージが浮かび上がってくるか、想像する楽しみを体験してみてください。

会期：2月16日（月）まで

「くっちゃんART 2015」

地方色豊かで、また国際色も豊かな倶知安ならではの作家たちが集う作品展。今年も賑やかな展覧会が始まります。

会期：2月21日（土）～3月22日（日）

ロビー展示

「北口さつき Four Seasons 冬」

水墨画で描く、雪降る冬の森の情景。

会期：2月15日（日）まで

「杉野宣雄 日本の押し花」展

倶知安町内の6会場で、ニセコの冬を押し花アートが優雅に彩ります。当館も美術館会場として協力します。テーマは『生命力』。

主催：倶知安観光協会

会期：2月16日（月）～28日（土）

※会期中休館日（17～20日、24日）があります、ご注意ください。

アート・イベントのお知らせ

土曜サロン「印象派への旅（2）～パリからジヴェルニーへ～」

日時：2月7日（土）14時～15時

講師：柴勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム

ミュージアム通信

小川原脩記念美術館

☎ 21-4141 FAX 21-4142

URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/

倶知安風土館

☎ 22-6631 FAX 22-6632

URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/kucchan-huudokan/

開館時間は9時～17時

（入館は16時30分）

2月の休館日

3、10、17～20、24日

木田金次郎美術館 ☎ 0135-63-2221

開館 20 周年

木田金次郎 アトリエからの再発見

会期：開催中 3月29日（日）まで

西村計雄記念美術館 ☎ 0135-72-2525

開館 15 周年記念展

「西村計雄美術館 15年のあゆみ」

会期：開催中 2月22日（日）まで

有島記念館 ☎ 0135-44-3245

「荒川好夫写真展『北海道 冬』

～蒸気機関車 C 62 栄光の記録～」

会期：開催中 2月22日（日）まで

海と山と田園と —ミュージアムロード情報—

風土館 イベントのおさそい

味噌づくりワークショップを開催します。風土館の畑で作った大豆を原料に「お味噌」をつくり、3kgをお持ち帰りいただきます。参加をご希望の方は、風土館に直接お申込み下さい。募集人員が少ないのでお早めに。

■日時／2月14日（土）10時～12時

■参加費／一人500円

■募集人員／5名（申込みの先着順）

■持ち物／エプロン、タオル、おへら、みそ4kgが入る密閉容器

■お問い合わせ／倶知安風土館 ☎ 22-6631

昨年の秋に環境省から公開された羊蹄山や倶知安の植生図づくりに携わった方を講師にお招きし、植生図の意味や使い方についてお話していただきます。特に、開拓との関連は本当に面白いので、ぜひ聴きにいらして下さい。

■日時／2月21日（土）14時～16時

■演題／植生図から見てくること

■講師／三木 昇氏

（江別市在住 環境アセスメント会社主任研究員）

■聴講料／無料（展示見学を含む場合は、お一人100円かかります）

感動一点 の場

『無題』

1960年頃 小川原 脩 画

この作品に題名はつけられていない。正確な制作年も記されていない。分からないことだらけの絵画である上に、何が描かれているのかも判然としない。しかし、アンフォルメル（定まった形を否定するという意味）と呼ばれる芸術の流れに影響を受けた時代の特徴から、制作年は1960年前後と推測できる。

1959年に倶知安町内の峠下遺跡の発掘に参加するなど、当時小川原の関心は考古学へと向かっていた。地中から現れる石器や土器片を見つけるたび縄文のテクノロジーに魅了され、次々と描いた。描かれるものは徐々に形を失い、この作品のようにイメージは変化してゆく。

黄色が印象的な温かな色彩に包まれた空間から、暗闇の洞窟を抜け、その先の明るくも混沌とした世界へ旅にでる。未知の世界、太古の世界への入り口なのだろうか。想像は膨らんでゆく。



ふる探訪 と

383回

—失われた森—

手元に書物のコピーがある。「北海道殖民地選定報文」といい、開拓適地を選ぶために明治19年から4年間にわたって行われた未開地調査の報告書で、発刊は明治24年。北海道開拓の計画と推進の基礎となった、その書物である。

同書に「クッチャン原野」の記載がある。要約すると「尻別川の河口から17里上流、東をムイネ、西にイワオ、北にクトサンそして南をマッカリベツの山々に囲まれた原野で、東西に広く南北に狭い。地形は西から東に向けて徐々に高く、北から南に低い。面積約860万坪のうち、726万坪の樹林地は農業に、134万坪の丘陵林地は放牧に適し、肥沃。低地にはニレやヤチダモが多く、直径6尺のニレや5尺のハンノキの大木が生え、さらにはミズナラ、ハリギリ、イ

タヤカエデを中心とする雑木林が見られる。直径6尺を越すミズナラや径が9尺のニレをしばしば見る。高原にはダケカンバが多く、下草は高さ5尺を越すチシマザサが繁る」。

記されたようなハルニレ、ヤチダモ、ハンノキなどの森林は、今では皆無に近い。ハルニレ林は農業に最適な場所として優先して農地化されたため、倶知安の植生図を見ても河岸の斜面に筋状に残るだけだ。湿地に生えるヤチダモやハンノキの林は、かつて倶知安で最も広がっていたと考えられるが、これらの森林は見事な耕作地に姿を変え、今では百年の森に点で残されるに過ぎない。

開拓はまさしく先達による偉業であった。かろうじて残るこれらの林こそ、その証拠として未来に残してゆくべきと思う。



山田地区に残る
ハルニレ林。
撮影：古市竜太さん

